

## 先秦兵書における「黄老化」について——『六韜』を中心として——

鈴木達明

はじめに

『漢書』芸文志（以下「漢志」と呼称する）の後半の三略、兵書略・数術略・方技略は、劉向が『七略』を編纂する時に、それぞれの専門家が整理を担当したものであり、後世の区分では「学」に当たる前半三略に対し、専門技術を扱った「術」に分類される<sup>1)</sup>。

これら「術」に属するテキストは、その性格と価値づけから、伝世資料の中に残りにくく、成立年代の推測も困難であった。しかし出土資料の相次ぐ発見によって、その研究は現在急速に前進しつつあり、単に成立事情の究明や内容の読解にとどまらず、方術（方技・術数）文献に保存された宇宙観や思考モデルを重視して古代中国の学術史を描き直す試みが進められている<sup>2)</sup>。

「学」と「術」を総合した視点から古代中国の知的状況を理解しようとする場合に重要な位置を占めるのが兵書類である。班固の自注によれば、「漢志」では、『七略』で二つの「略」に所属していた書物の一方を省く操作が行われたが、その対象となった書は全て兵書に関わるものであった（主に諸子略と重複）。これは、後半の

三略の最初に位置することと併せて、兵書類が「学」「術」双方の性格を併せ持つジャンルであったことを示している。

兵書には軍事行動の正当性に関する儒家思想や、組織管理上の法家思想など、様々な思想の影響が認められるが、本稿が注目するのは、道家思想、その中でもいわゆる「黄老思想」との関わりである。

周知の通り「黄老」とは黄帝・老子の併称とされ、『史記』に初めて見える名称である。一九七三年に馬王堆漢墓から出土した『経法』『経』、『十六経』などの『黄帝書』を重要な基準として研究が進められた結果、次のような概念としてとらえられている。

もともとは戦国時代中期あるいは後期に成立した道家思想であり、漢代初期に政治術として広く流行した。その中心は、天文現象に則した規則的な天道に依拠することを説く「天道思想」にあり、儒家や法家をはじめとする諸子の思想を取り入れながら、天道思想によってその基礎づけを行っている。また陰陽五行説や精気論、養生説と親和性が高く、後漢以降は神仙術と深く関わるようになる。

近年、この「黄老」の概念を、数術・方技を中心とした「黄」の系統と、道家哲学である「老」の系統との結合としてとらえ直す説

が李零氏によって提出されている<sup>(3)</sup>。黄老の諸要素を「黄」「老」の二系統に区分して論じることが今までも行われてきたが、李零氏の創見は、「黄」の中核に数術・方技の知識を据えることによって、黄老思想の思弁的な部分に対して従来あくまで付随的・周辺の要素として扱われていた方術の役割を、改めて高く評価することにある。この主張の主な根拠となるのは、「漢志」における黄帝書（黄帝の家臣に仮託されるものも含む）の分布である。黄帝書は方技・数術の二略の他、諸子略の道家類と兵書略の兵陰陽類にも多く含まれている。李零氏は、方術の知識が「道」の思想の背景にあつて語彙やモデルを提供する一方、「道」の思想は方術を理論的に基礎づけることで、両者は相補的な関係性を有していたと考えている。

李零氏の黄老概念の妥当性については『史記』の記載などを含めた検討が今後必要であるが、黄帝書の分布傾向と同様に「学」「術」双方に跨る性質を持つ兵書の分析において、方術の役割を重視するこの視座は一定の有効性を持つと思われる。そこで本稿では、李零氏の黄老概念、特に「黄」についてのとらえ方を一つの足がかりとして、軍事に関する方術知識である兵陰陽軍術と、黄老の思弁哲学としての面を代表する天道を重視した道家思想とが、兵書においていかに結びついているかを考察する。本題の「黄老化」とは、その結合を指す呼称であるが、次節にて具体的な例を見た上で、改めて説明することとしたい。

兵陰陽について、「漢志」兵書略は「陰陽者、順時而發、推刑德、隨斗擊、因五勝、假鬼神而爲助者也」（兵陰陽とは、適切な時に準じて行動を起こし、刑・徳を推しはかり、天文の示すところに従い、五行相勝に依拠し、鬼神の力を借りて助けとするものである）と説

明する。「漢志」の他に、『尉繚子』におけるこの種の兵法への批判の中で名指しされる諸要素（天官篇の「天官・時日・陰陽・向背」や武議篇の「孤虚を考え（城）（威）池を占い、龜兆を合わせて吉凶を視、星辰風雲の変を観る」）などに基づき、様々な占星術や、有利な地勢を知る「向背」、「氣」や音の響きから動向を知る「望氣」「五音」の予測術などを含む兵法を兵陰陽軍術と呼称する。

#### 一 『六韜』の「黄老化」について

先秦の兵書の中でも、『六韜』に対しては、既に浅野裕一「『六韜』の兵学思想」が黄老思想との関係性を検討している（以下浅野氏の引用は全てこの論文に基づく）。浅野氏は、『六韜』には天人相関と天人分離という矛盾する思想が同居すること、前者の中には、黄帝書や『老子』に代表される「黄老道」の影響を強く受ける天人相関思想とともに兵陰陽軍術（浅野氏の用語では「陰陽流兵学」）の要素が見られることを、具体的な例を挙げて詳細に論じている。

浅野氏の考える黄老道の概念は、天道を重視する「范蠡型思想」と『老子』との結合である。兵陰陽軍術はこの本来の黄老道とは異なった体系とされており、その点で方術を黄老の構成要素として重視する李零氏とは大きな違いがある。ただ、取り上げている諸要素はそのまま本稿の議論と関わるものであるため、以下では重複を厭わずに検討するが、浅野氏と重なる例は説明を簡略化する。また定型的な押韻句と考えられるものについては、押韻箇所を指摘している<sup>(4)</sup>。先に挙げるのは、兵陰陽軍術に関わる部分である。

例1 龍韜・王翼篇「天文三人。主司星曆、候風氣、推時日、考符驗、校災異、知人心去就之機」

天文は三人。星の動きと曆数をつかさどり、風向きと氣候を窺い、しかるべき日時を推しはかり、天の祥瑞と人事の符合を考え、災異をはかり比べ、人心の去就の兆しを知ることを担当する。

例2 龍韜・五音篇「夫律管十二、其要有五音。宮商角徵羽、此其正聲也、萬代不易。五行之神、道之常也、可以知敵。(省略)五行之道、天地自然。六甲之分、微妙之神」

音程を調律する管楽器には十二本あり、その(作り出す)音は五音に集約される。宮・商・角・徵・羽、それこそはその純正な音であり、永遠に変わらぬものである。五行の神妙な関係性は、道の不変の理であつて、それで敵を知ることができる。(省略)五行の道は天地が自ずからそうであるものであり、六甲の配分は微妙なる神秘である。

例3 龍韜・兵微篇 攻城戦における望気術を述べる。

例4 虎韜・三陳篇「日月星辰斗杓、一左一右、一向一背、此謂天陳」

日月・星・北斗の柄を、ある時は左にある時は右に、ある時は向かいある時は背にするように布陣する、これを「天陣」という。

例5 敦煌本・遠視篇「天地見變、必參月運・彗・虹蜺則桀」

天地が変化を現し、もしも月のかさ(「月運」は「月暈」に通じる)とほうき星、虹がそれに加われば凶事がある。

例6 銀雀山『六韜』十四(765簡・766簡)「……人當懼(衢)而

立。文王曰、何涂(途)之從。太公望曰、從上涂(途)往而毋顧。上涂(途)不遠、戒之母反(返)。其往……」

……人が十字路に立っていた。文王が「どの道をゆけば良いか」と言うと、太公望がこう答えた。「上途(上の道)をゆき、振り向いてはなりません。上途は長くはありません、用心して決して引き返してはなりません……」

最初の四例は浅野氏も取り上げている。例1の王翼篇は将帥の腹心について述べる部分で、引用した「天文」の他、「術士」・「方士」も兵陰陽軍術に関わる役目である。例2は五音の共鳴により敵の状況を知る方法を説く篇で、ここでは具体的な内容に入る前段部分を挙げた。例4は天道のモデルに従った布陣を説いている。

例5は天文現象から吉凶を洞察することを述べる。例6は、陳偉武『簡帛兵学文献探論』(注(四)前掲)六九頁にて、出発に際しての物忌み(「禳災辟凶」)の術として解釈されるものである。

他に豹韜・鳥雲山兵篇は、「陰陽」を布陣の説明に用いる点で兵陰陽軍術の「向背」に当たる可能性があるが、同じく地勢の利用を説く他の篇(豹韜の分陰篇や犬韜の戦車篇など)では似た術語は全く用いられていないため、取り上げない。

次に、天道を重視した道家思想の例を見てみよう。

例7 文韜・守国篇「故春道生、萬物榮。夏道長、萬物成。秋道斂、

萬物盈。冬道藏、萬物靜。盈則藏、藏則復起。莫知所終、莫知所始。聖人配之、以爲天地經紀」(榮・成・盈・靜…耕部。起・始・紀…之部。)

そこで春の道理は發生であり、万物が生い茂る。夏の道理は

生長であり、万物は完成する。秋の道理は収斂であり、万物は熟し満ちる。冬の道理は貯蔵であり、万物は静まる。満ちれば収蔵し、収蔵すれば再び生起する。その終わりを知るものはない、始まりを知るものもない。聖人はこの道に則して、天地の綱紀とする。

例8 『群書治要』文韜・佚篇（敦煌本・動応篇）「人主好武事、兵革不息、則日月薄蝕、太白失行。故人主動作舉事、善則天應之以德、惡則人備之以力、神奪之以職。如響之應聲、如影之隨形。」（徳・力・職・職部。聲・形・耕部）

君主が武を振るうことを好み、戦争が続けば、太陽と月が接近して蝕となり、太白（金星）は本来の動きを外れる。だから君主の行動と仕事が良いれば天は徳を以てそれに対応し、悪ければ人々は武力をもつてその状況に備え、神妙なはたらきは君主という職をその人から奪う。その禍福の対応はまるで響きが音に対応し、影が形に従うようにぴったりと合致している。

例9 武韜・発啓篇「王其修徳、以下賢惠民、以觀天道。天道無殃、不可先倡。人道無災、不可先謀。必見天殃、又見人災、乃可以謀。」（殃・倡・陽部。災・謀・之部。災・謀・之部）

王よ、どうか徳を修め、賢人にへり下り民を慈しみ、天道をよくご覧になって下さい。天道が災害を下さなければ、それに先だつて（殷を討つことを）宣言してはなりません。人事に災いがなければ、先にはかりごとをめぐらしてはなりません。必ず天の災いを見、人事の禍を見て、それからはかりごとを行うべきです。

例10 龍韜・軍勢篇「聖人徴於天地之動、孰知其紀。循陰陽之道而

從其候。當天地盈縮、因以爲常。物有生、死、因天地之形」

聖人は天地の動きをしるしとするが、その規則を知るものはいない。陰陽の道理に随順して、その兆候に従い、天地の伸び縮みに応じて、それを恒久的な法則とする。万物の生死は、天地のこの変化の形に因るものである。

例11 文韜・大札篇「安徐而靜、柔節先定。善與而不爭。虚心平志、待物以正。」（靜・定・争・正・耕部）

落ち着きゆつたりとして静かであり、柔和の節度がまず定まる。相手に与えることを優先して、人と争わない。心を空しくして思いを平らかにし、他物には公正に対応する。

例12 文韜・兵道篇「凡兵之道、莫過乎一。一者能獨往獨來。黃帝曰、一者階於道、幾於神、用之在於機、顯之在於勢、成之在於君。故聖王號兵爲凶器、不得已而用之」

そもそも用兵の道には、一を越えるものはない。一であるものは自らの思いのままに行動できる。黄帝はこう言っている。一とは道への階梯であり、目に見えぬ神妙な作用に近い。適切な機会にそれを用い、勢いに乗じてそれを明らかにし、君主によりそれを完成させるのである、と。そこで古の聖王は武器を不吉な道具と呼び、やむを得ないときにのみ用いたのである。

例13 『群書治要』文韜・佚篇（敦煌本・利人篇）「君不法天地、而隨世俗之所善、以爲法、故令出必亂」

君主が天地の法にのつとらず、世俗の良しとする価値に従って、それによって法律を作るために、命令が発せられれば必ず乱れる。

例14 敦煌本・距諫篇「冬鑿地穿山、通之於河、是發天之陰、洩地

之氣。天子失道、後必有敗。(中略)六月逐禽、是逆天道、絶地德、而人行賊。天子失道、後必無福」(德・賊・福・職部)「

冬に地を掘り抜き山に穴を開け、それを川へと通じさせることは、天の陰を開き、地の気を漏らすものです。天子があるべき道を失えば、後に必ず失敗があるでしょう。(中略)六月に鳥類を追い求めるのは、天の道に背き、地の徳を断ち切るもので、人々は他者に害を為すようになります。天子があるべき道を失えば、その後決して吉事は訪れません。

例15 武韜・文啓篇①「政之所施、莫知其化。時之所在、莫知其移。聖人守此、而萬物化。何窮之有、終而復始」(施・化・移・化部。有・始部)

聖人の政治が行われるところでは、人々がその教化に気づくことはない。天の時の去来は、人々がその移り変わりに気づくことはない。聖人はこのようなやり方を守り、万物は教化を受けて変わってゆく。そこに果てはなく、終われば再び始まるのである。

②「天有常形、民有常生。與天下共其生、而天下靜矣。太上因之、其次化之、夫民化而從政。是以天無爲而成事、民無與而自富。此聖人之德也」(形・生・生・靜部。事・富・徳部と職部の通韻)

天には定まった形があり、民にも定まった生活がある。(聖人が)天下の人々とその生活を同じくすれば、天下は静かになる。最上はただ(天と人の定まった形や生活)そのままにすることであり、次善は民を教化することで、民は教化されて政治に従う。そのため天は何も為すことなくそのはたらきを成し遂

げ、民は何も与えられなくともおのずから裕福になる。これが聖人の徳なのである。

ここでも最初の四例(例7〜10)は浅野氏が取り上げており、例11と12も同論文の中で馬王堆帛書『称』や『老子』と類似する例として指摘されている。付け加えれば、例11は馬王堆帛書『黄帝書』のみならず、『管子』九守篇、『鬼谷子』符言篇にも見える警句で、当時流行していた道家言と考えられる。

例13は「天地」を従うべき「法」とする政治を説く。例14は太公が桀と紂に対する民の諫言を引く部分で、時令説的な天地の秩序に逆らうことが「失道」とされている。例15は、政治における聖人の行いについて述べた篇で、「無為」による統治や「静」の重視など、様々な道家思想的要素が見られる。②のように、「天」の不変の形と類比的に民にも定まった生活の形があると述べ、「天」の無為に則った統治を理想とするのも、天道を重視した道家的統治法と言えよう。

これらの例では、引用部分以外にも、篇全体にわたって同様の道家思想的要素が見られるものが多く、また例文にも示したように、定型的な押韻句がしばしば用いられている。今まで筆者は黄老思想に関するテキストに定型的な押韻句が出現することを論じてきたが、『六韜』でも同じ現象が指摘できる。

ここで注目すべきは、1〜6と7〜15に代表される両系統の間に、しばしば内的結合性が見られることである。

浅野氏も例8について両者が一部融合した形跡が窺えることを指摘しているが、両者の融合はそれにとどまらない。例1の王翼篇の前段では、「將有股肱羽翼七十二人、以應天道」(將帥には手足や

羽翼となる家臣が七十二人おり、天道の七十二候に対応している）としている。また例2では、「五音」による予知術を一般的な理論によって基礎づけており、例14の距諫篇でも、最初に天候の乱れによる凶作の原因を問われた太公の答えは、「此大禁、逆天機、動地樞也」（この大禁は、天のはたらきに逆らい、地のかなめを動かすことである）から始められており、引用部分でも時令説的な禁忌を具体的に述べて、それを君主が天道に従うことに結びつけている。

以上のように、『六韜』では、兵陰陽軍術を単に一つの軍事技術として述べるだけでなく、それを天道や五行といった規則性と結びつけ、理論化することが積極的に行われている。この状況は、はじめに紹介した李零氏の黄老の概念と合致するものと言えよう。そこで、このように天道思想を重視する道家思想と兵陰陽軍術とが理論的な関連性を持って結合している状態を、以下では兵書の「黄老化」と呼称することとする。

## 二 他の兵書における「黄老化」の様相

それでは、『六韜』のような「黄老化」は、他の兵書にも認められるものなのだろうか。まずは『武経七書』中の先秦兵書、『孫子』『呉子』『司馬法』『尉繚子』について検討する。

兵陰陽軍術については、以下のような例がある。

例16 『孫子』始計篇「天者、陰陽・寒暑・時制也」

天とは陰陽・寒暖・時節である。

例17 『孫子』行軍篇①「凡此四軍之利、黃帝之所以勝四帝也」

これら地形による四種の軍隊の利益は、黃帝が他の（青・赤・白・黒の）四帝に勝つた原因である。

②「凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生處實、軍無百疾、是謂必勝。丘陵隄防、必處其陽而右背之。此兵之利、地之助也」

軍隊の布陣は、高所を良しとし、低地を悪しとする。陽（乾燥した東南面）を貴んで陰（湿った西北面）を避け、水と飼料のある地を選び高所に陣取れば、軍中に病が広がることもない。これを「必勝」という。丘陵や堤防には、必ずその陽に軍を置き、右側と背面にその丘陵・堤防を置く。これが軍事上の利益であり、地形の援護によるものである。

③「凡地有絶澗・天井・天牢・天羅・天陷・天隙、必亟去之、勿近也」

土地に絶澗・天井・天牢・天羅・天陷・天隙といった地形があれば、必ず速やかにそこから離れ、近づいてはならない。

例18 『孫子』火攻篇「發火有時、起火有日。時者、天之燥也。日者、月在箕壁翼軫也。凡此四宿者、風起之日也」

火を放つには適当な時があり、その火が燃え上がるには適当な日がある。適当な時とは、氣候が乾燥している時である。適当な日とは、月が箕・壁・翼・軫の星宿の位置にある時である。この四つの星宿にある時は、風が起る日である。

例19 『呉子』凶国篇「必告於祖廟、啓於元龜、參之天時、吉乃後舉」

必ず祖廟に報告し、大亀によって占い、天の時に照らし合わせて、吉ならばそこではじめて行動を起こす。

例20 『呉子』治兵篇「無當天竈、無當龍頭。天竈者、大谷之口、

龍頭者、大山之端。必左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、招搖在上、從事於下」(虎・武・下…魚部)

天竈や龍頭に布陣してはならない。天竈とは深い谷の入り口であり、龍頭とは大きな山のふもとである。必ず青龍を左に、白虎を右に、朱雀を前に、玄武を後ろにし、招搖(北斗の柄端の星。ここでは北斗星を喩える)を上に掲げ、その下に行動する。

例21 『司馬法』定爵篇「凡戰、有天・有財・有善。時日不遷、龜勝微行、是謂有天」

戦いというものには、天があり財があり善がある。時機を失わずに、龜卜して吉を得て秘密のままに事を運ぶ、これを「天がある」と言うのである。

例22 『司馬法』用衆篇「凡戰、背風、背高、右高、左險。歴沖、歴圯、兼舍環龜」

戦いというものは、風を背にし、高所を背にし、高所を右側にし、険阻の地を左側にする。湿地を通る時、また行軍に難のある険しい地を通る時は、昼夜ともに進み、四方防衛せよ。

本稿では、先行研究を参照した上で、天官や陰陽・五行に関わる術語が用兵法や軍事制度の説明の中で使用されているものを広く兵陰陽軍術の受容を示すものとして扱っている。このような認定の仕方に対しては、例17や20のように術語が使用されているというだけでなく、人事の範囲で理解できるものまで兵陰陽軍術として良いのか、という異論もある。詳しくは次節で検討するが、単に用語の使用にとどまる場合も含める理由について、例20を例として説明する。

四獸と招搖が組み合わされた類似表現は、『礼記』曲礼上篇、『鵠

冠子』天權篇などの伝世資料の他、出土資料では、布陣の方向を言う『蓋廬』第四章や、卜占に用いる式盤上の北斗の使用法として見られる馬王堆帛書『刑德』丙篇(「此用斗之大方也。故曰左青(龍、而右)白虎、前丹蟲而後玄武、招搖在上、□□在下、乘龍戴斗、戰必勝而功(攻)必取、善者從事下」)があり、兵陰陽軍術の様々な事象について、この表現が用いられていたことがわかる。『呉子』の例は軍旗の絵柄について述べたものだが、同時期に成立したと考えられるこれらのテキストを背景として考えると、兵陰陽軍術的な知識と切り離されたものとして扱うのは適当でない。

具体的な技術を扱う兵陰陽軍術が、理論的な要素と比べて後世に伝わりにくいことを踏まえれば、これら『孫子』『呉子』『司馬法』に残る兵陰陽軍術の受容の形跡を過小評価することはできない。その一方、これらの兵書において、天道思想を重視する道家思想の直接的な影響は極めて限られている。

例23 『孫子』兵勢篇「凡戰者、以正合、以奇勝。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江海。終而復始、日月是也。死而更生、四時是也。聲不過五、五聲之變、不可勝聽也(中略)奇正相生如環之無端、孰能窮之哉」

そもそも戦いというものは、「正」によってぶつかり、「奇」によつて勝つ。そこでうまく奇法を使う者は、天地のごとく窮まりなく、大河や海のように尽きることがない。終わってはまた始まるものは太陽と月である。息絶えては再び生まれるのは四季のめぐりである。音階は五つしかないが、その五つの音階の変化は、全て聞き尽くすことはできない。(中略)「奇」「正」

がともに生成するのは、丸い輪に端が無いようなもので、誰もそれを窮め尽くすことができない。

例24 『司馬法』仁本篇「其有失命、亂常背德、逆天之時、而危有功之君、徧告于諸侯」

その上命に違ひ、常道を乱し君徳に背き、天の時に逆らつて、勲功のある君主に危害を加える者がいれば、広く諸侯に告げる。

例25 『司馬法』定爵篇「五慮」の中に含まれる「順天」。後に「順

天、奉時」（天に順うとは適切な時を守ること）と解説される。

以上は単に「上天」の意味でなく、法則性を持った天道としての「天」を重視すると考えられる例に限定したもののだが、例23を除き、その天道によつて兵陰陽軍術を基礎づけたり、理論化し敷衍したりする例は無い。例23も、「正」「奇」を運用するモデルとして日月・四時に言及するものであり、道家的な天道への依拠を説くものと言えるか否かは判断が難しい。これらの先秦兵書では、『六韜』のような「黄老化」は希薄であると言つてよいだろう。

なお、以上の他に、「無形」「無為」「静」といった概念の重視、水の比喩のように『老子』との関係性が強く窺える例や、『老子』を明らかに踏まえた表現が、『孫子』『六韜』『尉繚子』に存在する。

ただ、天人相関説を厳しく批判し、兵陰陽軍術もほとんど見られない『尉繚子』に最も多く見られること、時には兵陰陽批判と同時に出現しさえすることからも、それらの『老子』と関わる表現は、天道を重視する思想や兵陰陽軍術とは思想的に距離があつたと考えざるを得ない。「黄老」の「老」が『老子』本来の思想とどう関わるかは大きな問題であり、ここでこれ以上踏み込んで論じることにはできないが、少なくとも本稿で扱う「黄老化」に関しては、『老子』

の影響は非常に少ないものであると考えられる。

さて、出土資料に目を向けると、銀雀山漢簡の『孫子』佚文の地形二篇・黄帝伐赤帝篇や「孫臏兵法」月戰篇・地葆篇などの兵書の他、術数類に分類されるテキストにも兵陰陽軍術に関する記述が見られる。しかしながら、これらは純粹な技術文献としての性格が強く、道家思想を理論的依拠とするものは、後述の『蓋廬』など、ごくわずかである。

その他、諸子やそれに類する文献に含まれる軍事に関わる記述の中で、道家思想を理論的支柱としているものに、『国語』越語下や『淮南子』兵略訓、馬王堆帛書『黄帝書・称』、『鶡冠子』近迭・王鈇・世兵・兵政・天権篇などがある。『鶡冠子』の一部を除き、これらの中で具体的な兵陰陽軍術が述べられることはほとんど無い。

一方で、『六韜』以外に「黄老化」した兵書としては、張家山漢簡の『蓋廬』と、『鶡冠子』王鈇篇・天権篇がある。また、残簡ではあるが、銀雀山漢簡の『地典』も似た性質が見られる。

『蓋廬』の兵陰陽軍術と道家思想については先行研究があるので、そちらに譲ることとしたい（注（四）参照）。『鶡冠子』王鈇篇は、成鳩氏がそれによつて天下を治めたとされる「成鳩之道」についての寵子と鶡冠子の問答から成る。『管子』小匡篇や『国語』齊語と類似した行政制度（「五家爲伍、伍爲之長」に始まるもの）を述べた後で、「天用四時、地用五行、天子執一以居中央、調以五音、正以六律、紀以度数、宰以刑徳」（天は四季を用い、地は五行を用い、天子は「一」を保持して中央に居り、五音によつて調整し、六律によつて修正し、度数によつて治め、刑徳によつて統御する）と天道

思想的な概念と結びつけ、更にそれを「天曲日術」として定義している。

天権篇は軍事を中心に「道」に則すことを論じるが、その中では「所肄學兵、必先天權」（軍事を学ぶのには、必ず「天権」を先にする）として、例20と同様の四季・四獸を象った旌旗や、「陳以五行、戰以五音」（五行によって布陣し、五音に従って戦う）という五行・五音に基づく用兵も説かれている。

『地典』は銀雀山漢簡「兵書叢殘」に含まれる、黄帝と地典の君臣問答である。未編聯部分も多く、読みにくいだが、次の一段などは、道家思想と兵陰陽軍術の結合が認められよう。

例26・「兵書叢殘」地典（1107簡〜1109簡）「……敗、高生爲德、下死爲刑、四兩順生、此胃（謂）黄帝之勝經。・黄帝召地典而問焉、曰、吾將興師用兵、亂其紀剛（綱）、請問其方。地典對曰、天有寒暑、地有兌（銳）方。天……天有十二時、地有六高六下。上帝以戰勝……」（刑・生・經・耕部。兵・剛・方・陽部）

……は敗れる。高所の生地を「徳」とし、低所の死地を「刑」とし、四兩（？）が順序よく生ずる、これを黄帝の勝経（勝利の要諦）と言う。・黄帝は地典を招いて尋ねた。「余は軍を興し武力を振るい、その道筋を正しく整えようと思うが、その方策を教えてください。」地典は答えた「天には寒さ暑さがあり、地には尖ったものと平たいものがあります。天……天には十二時が有り、地には六高六下が有ります。上帝はそれにより勝利を収め……」

### 三 兵書における「天」と「人」の関係について

兵書の中には、天人相関説や兵陰陽軍術に対して懐疑的・批判的な記述も見られる。それらは各兵書での兵陰陽軍術の採用や「黄老化」とは矛盾する可能性があるが、どう解釈すべきだろうか。

兵書における兵陰陽軍術への批判的記述を重視する見方としては、浅野氏の研究を発展させた湯浅邦弘氏の諸研究がある。湯浅氏は『中国古代軍事思想史の研究』及び『戦いの神』の中で、人事主体の兵学思想と兵陰陽軍術を基本的に相容れないものとし、「漢志」において『孫子』『呉子』『司馬法』などが属する兵権謀は、合理と呪術という点で兵陰陽とは鋭く対立するという。本稿前節で挙げた諸例についても、合理的な解釈が可能である点で、人事主体の兵学と対立しないため兵陰陽的要素には当たらないとしている。

それに対し、筆者はこれらの兵書における「人事」と「天道」は連続的にとらえることができると考えている。以下、三つの点からその理由を説明する。

最初に、兵書には天・地・人各要素の総合的運用を説く考え方が広く見えることが挙げられる。例16に「天」の内容を挙げた『孫子』始計篇の五事が「道」「天」「地」と並んで「將」「法」を挙げることや、『司馬法』仁本篇に「先王之治、順天之道、設地之宜、官民之徳」（古の聖王の治世は、天の道に順い、地の適当とするところに合わせ、民の有徳者を官につけた）と説くことなどはその例である。

次に、表面上の記述では判断しがたい、いわば「見かけ上」の批判が多いことにも注意しなければならない。

その一つに、不吉なことや不可思議なことを語る言葉が、軍隊の志気の低下を引き起こすという理由から批判されることがある。『六韜』文韜・上賢篇「僞方異伎、巫蠱左道、不祥之言、幻惑良民、王者必止之」（いんちきで奇妙な方技の術、道に外れた占い、不吉な言葉、これらで良民を惑わす者たちを、王者は必ず止めなければならぬ）や、『孫子』九地篇「禁辞去疑、至死無所之」（あやしげな迷信を禁止して、疑惑をなくせば、死ぬまで他へ心を移すことはない）がその例である。一見批判的に見えるが、『墨子』迎敵祠篇で望氣・卜占の情報の管理が求められるように、これらは兵陰陽軍術の持つ一種の効果と、それへの防護策を述べたものであつて、兵陰陽軍術を批判したものではない。例1の『六韜』王翼篇でも「術士二人、主爲譎詐、依託鬼神、以惑衆心」（術士は二人、主に怪しいまやかしを行い、鬼神にかこつけて、（敵の）民心を惑わすことを担当する）と、その効果を敵に対して用いることが述べられることから明らかである。

あるいはまた、確度の高さや程度の甚だしさを強調するために、卜占を比較対象として否定的に取り上げることがある。『呉子』料敵篇「有不卜而與之戰者八」（占うまでもなく敵と戦う八つの状況）・「有不占而避之者六」（占うまでもなく敵との戦いを避ける六つの状況）がその例であるが、これらは当然、天道の規則性や卜占の効果を確認した前提での比喩である。

また、天道と比較して人事を重視しているように見える場合でも、限定した局面における人事の有効性の主張に過ぎないことがある。たとえば『孫子』地形篇には「凡此六者、非天地之災、將之過也」（この六者（の敗れ方）は皆、天地による災いではなく、将帥たる

者の過ちである）とあるが、これはその前段の「凡此六者、地之道也」と対応し、「天」「地」でなく「將」に原因があるケースについて言うもので、同篇末に「知天知地、勝乃可全」（天を知り地を知ること、勝利ははじめて確定できる）とあることから、二者択一的に「天道」を否定する思想に基づくものでないことは明らかである。

最後に、「漢志」の記述によれば、兵権謀類は兵陰陽類と対立するものではなく、むしろそれを包括した分類であつたと考えられる。「漢志」兵書略には「權謀者、以正守國、以奇用兵。先計而後戰。兼形勢、包陰陽、用技巧者也」（權謀とは、正道をもって国を守り、奇道をもって軍事を行う。先に計算してその後で戦う。形勢を兼ね合わせ、陰陽を包括し、技巧を用いるものである）と説かれ、傍線部のように、兵形勢・兵陰陽・兵技巧全てを包括するとされる。更に『老子』五十七章を典拠とする「以正守國、以奇用兵」は、純粹な軍事活動以外の政治的要素をも含んだ概念であつたことを示唆しており、兵書と諸子類の重複例がこの兵権謀に集中していることから、総合的なジャンルであつたとすべきであろう。

以上から、先秦兵書の多くでは、人事主体の軍事思想と兵陰陽軍術とは対立的な関係になかつたと考えられる。

一方で、既に指摘されるように、兵陰陽軍術に対する、明確かつ厳しい批判も存在した。その代表が『尉繚子』であるが、ここで問題となるのは、『六韜』にも同様の兵陰陽軍術批判が見られることである。

例27. 文韜・盈虚篇「禍福在君、不在天時」

禍福は君主にかかるのであり、天時にかかるとはならない。

例28・『群書治要』龍韜・佚篇「凡天道鬼神、視之不見、聽之不聞、索之不得、不可以治勝敗、不能制死生、故明將不法也」

天道・鬼神というものは、それに目を向けても見えず、耳を傾けても聞こえず、探し求めても手に入らず、それによって勝敗を定めることはできず、死生を制することもできない。だから聡明な将帥はそれに則ることはない。

例29・銀雀山『六韜』一〇・葆啓篇。竹簡本では残欠箇所が多いが、『太平御覽』卷三二九などに引かれる類似した佚文を参考にすると、殷を討つにあたり、不吉なことが起こったため周公旦は武王を止めたが、太公の言に従って軍を進め、牧野にて殷を破ったという説話である。このパターンの説話は極めて多い。

これらは軍事行動に際して天が人事に対して予兆を示すという考え自体を批判するものであり、黄老思想の根幹である天人相関説の批判とも考えられるものである。

浅野氏もこれらを黄老道や兵陰陽軍術と矛盾するものとして挙げ、その齟齬は本来別系統の資料が後世の『六韜』編集時に一緒にされたことを示すと解釈する。その上で、「漢志」の太公における「謀・言・兵」の区分がその背景にあるという推定を行っている。現在の『六韜』が、成立事情を異にするテキストの集合であり、その重要な一つの淵源に「漢志」に著録される『太公』があるのは間違いない。また例27～29に描かれる太公の言動が、例1～15とは大きく異なることも確かである。

だがこれらの批判的な例を、果たして系統的な思想を表明したものととらえて良いのだろうか。問題とすべきは、例29と同類型の多

数の佚文をはじめ、ほとんどが武王の伐紂説話として出現していることである。例28は、天・地・人三者を比較した上で、「天道」の不確定性とそれが人為的に仮構されたものであることを指摘して、人事の優先を説くという、『六韜』の中でも特に明確な天道批判が見られる篇の一部であるが、これもまた『十一家注孫子』計篇の杜牧注・『通典』一六二・『太平御覽』卷三二八などの類似した引用では伐紂説話を舞台とした説話となっている。

周の武王が紂王を伐つ時に凶兆が現れたが、それを無視して勝利を得たという故事は『史記』斉太公世家にも見える有名な説話であり、兵陰陽軍術批判では格好の典故としてしばしば引かれるものである。時代の確定できる文献では『荀子』が最も早い例であろう。

例30・『荀子』儒效篇「武王之誅紂也、行之日以兵忌、東面而迎太歳、至汜而汎、至懷而壞、至共頭而山隧。霍叔懼曰、出三日而五災至、無乃不可乎。周公曰、剝比干而囚箕子、飛廉・惡來知政、夫又惡有不可焉」

武王が紂を討伐したとき、その日は軍事の厄日である上、東方へ向かったので太歳の星に向かうことになり、汎の地に至ると河水が氾濫し、懷の地に至ると道が壊れ、共頭に至ると山が崩れた。霍叔は恐れて言った。「出兵して三日で五つもの災いが生じた。(出兵しては)いけないのではないか。」周公は言った。「比干を裂き箕子を虜囚として、飛廉・惡來のような奸臣が政治を握っている。いったいまたどうしていけないことがあるのか。」

この説話類型は、文王・武王が紂王を伐つ時に、何らかの理由で

出兵を諫める人物 A が登場するが、賢者 B の提言によって兵を進め、勝利を収めるという構成である。

A・B のパリエーションについて整理すると、A は、人物は登場せず状況が記されるだけの場合を除き、散宜生や周公旦が凶兆を理由として出兵を諫める例が多い。B には太公が入ることが圧倒的に多く、吉凶判断の否定を以て出兵を主張する場合が最も多い。この時、浅野氏のいう天人相関批判の様相を呈することになる。

ただし、それ以外の例も少なくない。『荀子』では B の役割は周公が担っているが、A を周公とし B を太公とする『六韜』の佚文の中には、太公の反論が『荀子』の周公の発言とほぼ同じ表現を持つ例がある（『太平御覧』卷三二八）。他に浅野氏も太公の性格が異なる例として言及する『太平御覧』卷三二九の例では、A は伯夷・叔斉が倫理的問題を説き、B は太公が吉兆を理由として出兵を促している。

このように変化する A・B について、その共通する要素を考えれば、この説話類型は、元来は天人相関説を批判したり、武王・太公の合理主義を顕彰したりするものではなく、周の絶対的正義や、太公望らの偉人性を強調することを目的としたものであったと考えられる。<sup>(二九)</sup>つまりそれらは、天道や吉凶の兆候に従うことが常識的立場と考えられていた状況を背景として成立したものであり、例 7 ～ 15 の天道重視の道家思想と対立する思想的立場を示す例として扱うのは適当ではない。

以上から、『六韜』における天人相関説批判は、非常に限定された部分にとどまるものであり、少なくとも例 1 ～ 15 のほとんどを占める文韜・武韜・龍韜やそれらと重なる範囲の佚文については、「黄

老化」した兵書としての性格を中心に考えるべきであろう。

#### 四 兵書の「黄老化」の原因―叙述形式から考える

兵書の中で、なぜ『六韜』をはじめとする一部のテキストにのみ「黄老化」の状況が見られるのだろうか。

浅野氏は『六韜』における兵陰陽軍術と黄老道との結合を、戦国時代後期の斉において起こったものと説明している。黄老思想と「稷下の学」との関わりや、『六韜』が斉の始祖である太公に仮託されることを考えれば、地域性に帰す説明は一定の説得力を持っている。

しかしながら、先秦時期における黄老思想の広がりには、馬王堆帛書『黄帝書』と語彙・思想的要素が共通する資料や、『史記』において黄老の系譜に位置づけられた人物の事跡などから間接的に推測されたもので、直接の史料によって確認可能な漢代初期の状況とは異なる。また『六韜』の方も、漢代以降大きな変化を被ってきたことが明らかなテキストであり、思想的なアプローチの有効性には限界があると思われる。そこで本節では、叙述形式という視点から、『六韜』の「黄老化」の原因を探ることを試みたい。

『六韜』の叙述形式は、現行本のほとんどが周の文王あるいは武王の問いに太公が答える問答体からなる。この問答は極めて形式的であり、問いはほぼ題目提起の役割しかなく、答えも意見を説明的に述べるもので、『孟子』や『戦国策』のような、議論の応酬や意見を異にする相手への説得といった問答とは異なっている。また回答側の言葉（太公言）には定型的な押韻句が含まれることがあるのも特徴的で、特に例 7 ～ 15 に引いた道家的な内容の諸篇に顕著であ

る。佚文の中には説話形式のものも存在するが、その場合でも形式的な問答が説話の中心を占めることが多い。

この『六韜』と似たスタイルの問答は、術数・方技のテキストにも多く見ることができ、漢代初期までの成立が確実とされる例では、『周髀算経』（周公・商高…前者が問い、後者が答える。以下同じ）や馬王堆帛書・竹簡の房中書『十問』（①黄帝・天師、②黄帝・大成、③黄帝・曹熬、④黄帝・容成、⑤堯・舜、⑥王子巧父・彭祖、⑦帝盤庚・耆老、⑧禹・師癸、⑨斉威王・文摯、⑩秦昭王・王期）、『胎産書』（禹・幼頰）、『天下至道談』の一部（黄帝・左神）、『養生方』の一部（湯・陳某、禹・群河）が同様の形式的な問答で構成される。馬王堆竹簡の房中書には定型押韻句も多く含まれている。

問答者の顔ぶれを見ればわかるように、この中には少なからぬ黄帝問答が存在する。他にも『黄帝内経』をはじめ、『抱朴子』遐覽篇及び『医心方』に残る「素女経」（黄帝・素女）や「玄女経」（黄帝・玄女）の佚文など、医書や房中書を中心に、同様の黄帝問答が広まっていたことがわかる。

一方で、黄帝書の中でも馬王堆帛書『経』（『十六経』）では、形式的な問答の他に説話や論説体の文章も含まれており、また黄帝言としては、「金人銘」に代表される銘文・箴言も多く伝えられているように、黄帝言が形式的な問答体に限定されていたというわけではないけれども、箴言と並んで、黄帝に仮託されたテキストに流行した叙述形式であったと推測することはできよう。

この結果から再び『六韜』に目を移すと、他のテキストで黄帝言として引かれる句が太公言に含まれる例はごく少数であつて、この

点で黄帝書との関係が強いとは言えない。ただし、直接黄帝言を引くのでなくとも、『六韜』やその他の太公書の中に、以下のような黄帝や黄帝言を尊崇する態度が見られることは注意してよいだろう。

本稿に挙げた例の中では、例12には黄帝言の引用が見られ、例6の銀雀山漢簡の佚文には、断簡ではあるものの、第32簡に「黄帝」の名が見え、黄帝言を含んでいた可能性がある。

また『太公金匱』（『芸文類聚』卷二三所引）や『太公』陰謀』（『群書治要』卷三二所引）には、武王が「五帝之戒」を尋ねたのに対し、「金人銘」を黄帝言として引く文が見える。

更に、『六韜』文韜・明伝篇に、「先王の道」の問いに答える太公言として「故義勝欲則昌、欲勝義則亡。敬勝怠則吉、怠勝敬則滅」（昌・亡…陽部。吉・滅…質部と月部の合韻。訳は省略）という文がある。『大戴礼記』武王踐阼篇には、「黄帝・顓頊之道」は存するかという武王の問いに対し、太公が斎戒を求めた上で「丹書」を示したという記事があるが、その冒頭に、前後二句が逆転しているが、明伝篇とほぼ同じ文が見られる。それは戦国楚簡『上海博物館藏战国楚竹書（七）』の「武王踐阼」でも同様である（但し「黄帝・顓頊・堯・舜之道」とされる）。「丹書」は、『呂氏春秋』応同篇などに文王の時に赤鳥が銜えて来た書とされるのが一般的であるが、『路史』卷一四・後紀五・疏佐紀では黄帝の作とされており、武王踐阼篇の文脈からも、ここでは黄帝言に準じた扱いをされていると考えられる。

このように、『六韜』や太公言に部分的ではあれ黄帝や黄帝言に対する権威化が認められることは、形式的な問答体の使用において

黄帝書と共通性を持つことと無関係ではないと思われる。加えて、『六韜』以外に「黄老化」した兵書と考えられたテキストの中でも、少なくとも『蓋廬』及び『地典』では、押韻も含めた叙述形式の類似と黄帝の尊崇が見受けられ、『鶡冠子』でも、王鈇篇に関しては叙述形式の類似性が指摘できる。これら「黄老化」した兵書における共通性を勘案すると、叙述形式の近似性は兵書の「黄老化」に密接な関わりを持つていた可能性があるものと推測される。

様々な技術や習慣の発明者を黄帝に仮託するという文化的流行は、戦国時代中期から漢代初期までの間に起こったとされている<sup>(三五)</sup>。技術文献における黄帝書の広がり、この特殊な問答体における黄帝問答や黄帝崇拜の記述の出現状況を考えると、この問答体の流行は、仮託対象としての黄帝の流行と同時期に起こった現象であることが推測される。それ以前から技術文献に同様の問答体が用いられていた可能性はあるけれども、その場合も黄帝書の流行に乗って、この問答体が急激な広がりを見せたことは確かであろう。

だとすれば、「黄老化」した兵書におけるこの問答体の共通性は、黄帝書ではないそれらのテキストもまた、黄帝が仮託対象として流行了したのと同じ状況において成立した、あるいは同じ種類の読者群によって伝承されてきたことを示しているのではないだろうか。

秦代以前の用例の不足もあり、黄老の実態についてはなお不明な点が多い。技術知識が黄老思想の重要な一翼を担っていたとする李零氏の説は、その実態の解明に重要な示唆を与えるものである。その視点から、叙述形式上の共通性を軸として技術文献と兵書を繋げ、黄老思想との関わりを考えることは、黄老の実態を知る一つの有効な手段になると期待される。

## 注

- (一) 「学」と「術」の区分については、倉石武四郎述『目録学』(東洋学文献センター叢刊影印版1、汲古書院、一九七九年) 十九頁、李零『簡帛古書与學術源流』(三聯書店、二〇〇四年) 三七五頁を参照。
- (二) 李零『中国方術正考』(中華書局、二〇〇六年)、葛兆光『中国思想史七世紀前中国的知識、思想与信仰世界』(復旦大学出版社、一九九四年) を参照。
- (三) 李零「説“黄老”」(『道家文化研究』第五輯、一九九四年)
- (四) 「軍術」の名称は、陳偉武『簡帛兵学文献探論』(中山大学出版社、一九九九年) による。同書六一頁注(三七) を参照。
- (五) 浅野裕一『黄老道の成立と展開』(東洋学叢書、創文社、一九九二年) 所収。四九六―五一九頁。
- (六) 但し、周の史官に起源を持つ点で両者は兄弟関係にあり、また『六韜』の一部では両者がすでに融合された形跡が窺えるとされる。
- (七) 押韻の判断は上古音の韻部により、その調査と認定に際しては郭錫良『漢字古音手冊(増訂本)』(商務印書館、二〇一〇年) によった。兵書の押韻箇所については、江有誥『音学十書』(中華書局、一九九三年) 先秦韻説と、龍宇純「先秦散文中的韻文」(『絲竹軒小学論集』、中華書局、二〇〇九年) を参照した。
- (八) 『六韜』を含め『武経七書』の引用は、全て続古逸叢書所収の静嘉堂藏本影印『武経七書』を底本とする。他に銀雀山漢簡(注(九) 参照)、宮内庁書陵部本影印『群書治要』卷三一、敦煌出土唐写本残卷(P. 3454) を参照した。なお、前漢時期の出土資料として、銀雀山漢簡の他に八角廓漢簡の『六韜』がある。ただ、断片的な記述が多く、特に現行本

や他のテキストに無い記述については、その思想性を論じることが困難なため、本稿では扱わない。

- (九) 銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡(老)』(文物出版社、一九八五年)及び同『銀雀山漢墓竹簡(貳)』(文物出版社、二〇一〇年)を参照した。篇名や篇番号もこの両冊による。
- (一〇) 底本は「萬物尋」に作るが、敦煌本等に従い改めた。
- (一一) 拙論「道」のための有韻文——『莊子』の定型押韻句と黄老思想——『東方学』第百十五輯、二〇〇八年)、同「楚地出土簡帛資料における定型押韻句について」(『中国文学報』第七十六冊、二〇〇九年)を参照。
- (一二) 銀雀山漢簡では、「時制」の後に「順逆・兵勝」が続き、より明確に兵陰陽軍術を示す記述となっている。
- (一三) 以上の兵陰陽軍術の要素については、李零『《孫子》十三篇綜合研究』(中華書局、二〇〇六年)四二一頁及び同『司馬法詁注』(河北人民出版社、一九九二年)の解釈を参照した。
- (一四) 邵鴻『張家山漢簡《蓋廬》研究』(文物出版社、二〇〇七年)及び石井真美子「張家山漢簡『蓋廬』に見られる兵陰陽についての一考察」『学林』第46・47号、二〇〇八年)参照。
- (一五) 陳松長「帛書《刑德》丙篇試探」(李学勤主編『簡帛研究』第三輯、一九九八年)を参照。
- (一六) 現行本は「循環之無端」に作るが、竹簡本に従って改めた。
- (一七) 『尉繚子』武議篇では、第一節に引いた具体的な兵陰陽批判に続いて「故兵者凶器也、争者逆德也、將者死官也。故不得已而用之」という、「老子」第三十一章を踏まえたと考えられる表現が見られる。
- (一八) 馬王堆帛書の『五星占』『天文氣象雜占』『刑德』、銀雀山漢簡では第二輯に「陰陽時令、占候之類」としてまとめられるテキストの多くが軍事を重要なトピックとして扱っている。

(一九) 『淮南子』兵略訓については、湯淺邦弘『戦いの神』(研文出版、二〇〇七年)第二部第二章、馬王堆帛書『称』は、同『中国古代軍事思想史の研究』(研文出版、一九九九年)第二部第九章を参照。

(二〇) 黄懷信『鶡冠子集校集注 附通檢』(中華書局、二〇〇四年)一七八〜一九二頁を参照。一部に押韻句を含む。これが天文現象に基づく天道を人事に応用したものであることは、孫福喜『《鶡冠子》研究』(陝西人民出版社、二〇〇二年)三二四頁に指摘がある。

(二一) 陳偉武『簡帛兵学文献探論』(注(四)前掲)八八頁が「反軍術観点」として、『春秋左氏伝』や『国語』の例も含めて挙げている。

(二二) 注(一九)参照。『戦いの神』第三部第三章に結論が整理されている。

(二三) 李零『兵以詐立——我説《孫子》』(中華書局、二〇〇六年)三〇〇頁に指摘がある。

(二四) 湯淺邦弘『中国古代軍事思想史の研究』(注(二九)前掲)第二部第三章を参照。同『戦いの神』第三部第三章の整理でも、『尉繚子』の批判がその他の兵書とは異なる深刻さを持つことを指摘している。

(二五) 浅野氏は他に龍韜・農器篇や虎韜・軍略篇での記述を、「人事の重要性を強調する形で、言わば間接的に天人分離が語られていた」という理由から天人分離の例として挙げている(五一〇頁)。既に述べたように本稿では天道と人事を二者択一的にとらえない立場をとるため、こ

れらを天人相関説批判の例とはしない。

(二六) 『六韜』の成立の問題と各部分の性格については、拙論「叙述形式から見た太公書『六韜』の成立について」(『中国文学報』第八十輯、二〇一一年)を参照。

(二七) 新編諸子集成『荀子集解』一三四頁。盧文弨に従い「汜」字を「汜」に改めた。

(二八) 散宜生がAに当たる例は『芸文類聚』卷二、『太平御覽』卷一〇、卷三二八、卷七二六にほぼ同型で見える。周公がAに当たる例は『太平

『御覽』卷一三、三二八、卷三二九に見える。

(三九) より早い時期の文献である『国語』周語下では、武王伐紂時、吉兆である歳星が周の分野にあったとされる。この吉兆から凶兆への変化について、胡文輝『中国早期方術与文献叢考』(中山大学出版社、二〇〇〇年) 一一九頁は、戦国時代後期に、周王への権威付けのために、従来の伝承を変える創作が行われた可能性を指摘する。

(三〇) 『六韜』の叙述形式について、詳しくは注(三六) 前掲拙論を参照。

(三一) 李零『中国方術正考』(注(二) 前掲) 第七章及び附録を参照。

(三二) 金人銘は『説苑』敬慎篇や『孔子家語』觀周篇に見られる。黄帝言における箴言の多さは蔽可均『全上古三代文』卷一・黄帝を参照。

(三三) 銀雀山漢簡にも見える文韜・守土篇の「日中必彗、操刀必割、執斧必伐。日中不彗、是謂失時」という定型押韻句が『漢書』賈誼伝の賈誼の上疏では黄帝言として引かれている。また、龍韜・論将篇の「十過」が、『北堂書鈔』卷一一五では『黄帝出軍訣』の文として引かれている。但しこちらは銀雀山漢簡の「兵書叢残」将過にも見えるもので、一般的な兵家言であった可能性が高い。

(三四) 『蓋廬』における定型押韻句については注(二) 前掲拙論「楚地出土簡帛資料における定型押韻句について」を参照。

(三五) 顧頡剛『史林雜識初編』(中華書局、一九六三年) 「三三 黄帝」、郭永秉『帝系新研』(北京大学出版社、二〇〇八年) 第二章第三節を参照。

〔付記〕本論の作成に当たって、査読者の方々には貴重なご意見を多く賜りました。厚く御礼申し上げます。